

獣 医 師 は 天 職

原口道夫[†] (くま動物病院院長・熊本県獣医師会)

私は畜産農家の次男として生まれ、自然の流れとして獣医師を志すようになった。

学生時代は、家畜衛生学教室に在籍し、卒業後、7年間を勤務医として過ごし、昭和58年に地元熊本県において家内と二人で開業した。

私は産業動物(黒毛繁殖牛、肥育牛、乳牛、豚)を、家内は小動物を主体として臨床に携わってきた。

私達が臨床を始めた頃は、日本の国力が右肩上がりであり、獣医学領域の進歩も目覚しく、20~30代まではワクワクしながら、新しい知識、診断技術、診療機器の修得に取り組んできた。農家が豊かになれば獣医師も豊かになれるという思いで畜産農家への啓蒙に努めたが、一人では思うにまかせず、産業動物獣医師として、火消し役を果たすことを念頭に、乳房炎、第四胃変位症、肥育牛の尿石症の原因・予防・治療を主なテーマとして取り組んできた。

乳房炎については、現在、共に取り組む仲間も増え、この6月には熊本県の乳房炎協議会が設立の運びとなる一方、優れた簡易選択培地が発売されたため、診断が容易となり、いよいよ乳房炎を減少させる環境が整いつつあると、息子を含む若い獣医師達4人とともに期待しながら今後の取り組みについて話し合っている。

第四胃変位症については、臨床を始めて以来、年間約100頭、約4,000頭の手術を行ってきたが、これまで減少することもなく、近年も増加の傾向にあると思われる。私見だが、第四胃変位症は、高タンパク・高脂肪・高デンプン飼料に対しての消化機能が適応していないため、嘔吐し、ルーメンジュースを第四胃内に逆流させ膨らませ、バルーン状態にし、下部消化管への負担を減らしストッパーとして働く、自己防衛反応だと考える。その予防として、クローズアップ期に利胆剤を投与し、事前に消化液を分泌させる準備運動をさせておくこと減少傾向となる。中には牛白血病、飼料計算・給与の失宜等を原因とする事例もあり、なかなか減少していない状況である。

尿石症による尿管・尿道閉塞、膀胱破裂については、ほとんどの発症が出荷時期であるため、と畜場で結石を確認した際は、「こんな小さい石が、大きな肉牛を倒してしまうのか」と自分の非力さを何度も思い知らされてきた。現在、尿道閉塞で膀胱破裂を伴わない症例では、キシラジンによる尾椎硬膜外麻酔後、カテーテルで排尿し、塩化アンモニウムを経口投与する。また、膀胱破裂

している患者は、開腹し排尿後、膀胱内にカテーテルのバルーン部分を留置して、下腹部にカテーテルの端を出し、皮膚に縫着し尿路を確保した後、膀胱の破裂部を縫合し閉腹する。これらにより1,2カ月の留置後、ほとんど無事に出荷可能となった。

その後、40代になってバブル崩壊を経験し、コンピュータの普及と並行して、安心と安全が求められる管理の時代が訪れ、戸惑いながらもこれらに取り組み、50代になって、畜産農家の規模も拡大される中、火消しだけではなく、経営指導も行う獣医師のニーズが高まっていった。

そのような中、平成19年には、息子が小動物臨床獣医師として経営に参加し、同時に産業動物臨床獣医師として新卒の女性獣医師が着任し、これを機に、獣医師として地域の畜産振興へ貢献したいとの思いが強くなり、飼料計算・管理プログラム、感染防御プログラム、乳房炎原因菌の分離・同定・感受性試験、採卵、ET、各種外科手術の改良、LPS(ルーメンアシドーシス、大腸アシドーシス)と繁殖障害との関係、BLVの撲滅、啓蒙セミナーの開催等々、取り組むべき課題がますます増加していった。

しかし、現在、私の周りには、互いの力を出し合いながら共に様々な課題に取り組んでくれる、若い4人の獣医師、さらにその他、心優しいスタッフ達の存在があり、日々助けられ、励まされつつ、取り組みに邁進している。

今後も、彼らの成長する姿を見守りながら、自らも老いてなお健康に過ごし、夢の実現に向かって、生涯現役でありたいと考えている。

原口道夫

— 略 歴 —

- 1976年 宮崎大学農学部獣医学科を卒業し、1年間細菌学教室に研究生として在籍
- 1977年 熊本県畜産農業協同組合連合会勤務
- 1983年 原口家畜診療所開設
- 1989年 くま動物病院に改称し、現在に至る



(現在、獣医師6名、動物看護師3名、グルーマー2名、経理担当1名)

[†] 連絡責任者：原口道夫 (くま動物病院)